

## 『源氏物語』の夢と方法

川 本 真 貴

## 一

記紀の時代では、夢は人間が神々と交わる回路、神々が人間にその意志を伝える通路であり、一定の呪的祭儀的行為の対象となりえるものであった。それが、『万葉集』になると、そのような性格を殆ど無視したように、歌語として相聞歌に歌い出されるようになる。それと同時に、他界と結ぶ回路としてあった夢は、人間と人間を結ぶことに、より重点がかかってくるのである。

『万葉集』ではユメは、伊米、伊目、夢、伊味、伊麻、己具と表記され、ユメの語を含む歌は102首ある<sup>④</sup>。その内、全巻が相聞の巻四と古今相聞往来歌の巻十一、十二に合計65首と集中的に現われる。又、『万葉集』の相聞歌を、「特定の個人としての男性と女性との間の贈答歌」とするならば、夢の語を用いた歌で、相聞と無関係なものは10首余りしかない<sup>⑤</sup>。即ち、『万葉集』における夢の場は、「相聞的

世界」と限定できるのである。

更に、『万葉集』には、「夢を見る」という表現は見当たらない。全て、「夢に見る」である。夢は、見る人のうつつの世界を超えた客観的現象であり、世界であり、一個の存在であった。従って、うつつの世界と同様に夢の世界においても恋人は通ってくる。相手の訪れようという意志があつて初めて夢に見る。それは又逆に、自らが、眠っている間に相手に相手を訪れ、その夢に現われることもある。

旅に去にし君しも続ぎて夢に見ゆ吾が片恋の繁ければかも

(『万葉集』三九二九)<sup>⑥</sup>

恋する魂は雄飛し、「夢の通ひ路」を通過して相手の夢に姿を現わし、二人は逢う。万葉の時代も、夢はうつつの代償としての夢ではない。夢は、夢見る者にとつてうつつと同じ重さを持つのである。そして、歌語としての夢は、記紀の世界での聖なる夢とは全く別に、男女の個人的関係において恋を歌う相聞的世界の用語となりきつて

いる。そこでは既に、『古今集』における「恋と夢」という一對の表現方法が形を整え始めている。夢は、うつつと同様の実質性を有するものとして、恋の世界と緊密に関連しつつ、確かな存在感を持つていたのである。

『古今集』における夢の語は、34首、35例あり、26例までが「恋」の部立に現われている。『古今集』の部立は、題材や歌の内容を示しており、夢はまさしく恋の世界の用語であった。これ以後、「恋と夢」は相聞を歌う歌語として定式化される。が、万葉の時代、夢での二人の逢瀬はうつつでのそれと殆ど同じくらい確かなものであって、決して「はかない」ものではなかった。

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめば いやはかなにもなりまさ  
るかな (古今集「恋三〇四」)

この歌では、夢は、はかないという意味を含みつつも、いまだ「夢Ⅱはかない」とはなっていない。が、恋という場において、夢とはかなしが、結びついていることは、『万葉集』との決定的な違いとなっている。

『源氏物語』には796首の和歌が詠みこまれている。その中で夢の語を含む和歌は14首、内1首は、明石入道が明石上に宛てた文で、「ひかり出でんあか月ちかくなりにけりいまぞ見し世の夢語りす」(三二六)と歌ったものである。これは、昔見た「須弥の山」の

### 『源氏物語』の夢と方法

夢を指している。この歌を除いた13首中10首までが贈歌、又は答歌であり、独詠歌は3首である。

とけて寝ぬ寝覚さびしき冬の夜にむすばゝれる夢のみじかさ (二二〇)

この夢は藤壺のことであり、「いにしへの秋の夕の恋しきに今はと見えしあけぐれの夢」(三〇七)「大空を通ふまほろし夢にだに見えこぬ魂のゆくへ尋ねよ」(三二〇) いづれも背後に藤壺、紫上があり、完全な独詠歌というよりむしろ、相聞的独詠歌である。又、以上の3首を含めて、13首中11首が恋を歌っている。それ以外の2首は、「吹きまよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」(一四六)という「煩惱の夢」(古典大系196頁頭注)と、「後に又あひ見むことを思はんこの世の夢に心まどはで」(五二七)であり、「この世の夢」とは、「つまらない色々の出来事」(同二〇三頁頭注)であって、迷いの多い無常の現世の夢、と言いかえられよう。

『源氏物語』における歌語としての夢は、『万葉集』の相聞的世界、『古今集』の恋の世界を受け継いでいる。そして、更には、仏教的色彩を帯びた歌と、仏教以外の、又は以前の古代的呪的祭儀性、神仙思想が影を落としている歌がある。仏教は靈魂の存在を認めていず、根源的には仏教と、魂の浮遊は相容れない。同じ「夢」という語の中に、二つの相反する思想が息づいているのである。

## 一一

では、『源氏物語』の中で、この二つの思想は、夢として物語の思想とどのように関わっているのか。『源氏物語』の中で如何なる意味を持っているのか。

仏教の浄土教的思想が人々の心に深く根ざしてくると並行して、夢はこの世のはかなさの表象となり比喩となる。

『源氏物語』が、人間とその世の内実を苦悩と悲劇性において見てとってしまわなければならなかった時、それよりの救済の道は如何なるものであり得たのか。それは無常の想念をもって現世を穢土として否定し、厭離し、出来るなら欣求浄土の道に至ることであった。現世を夢として認識しようとするのもその為であったのである。

『万葉集』にも世の無常を歎いた歌はある。だが、はかなさを夢に喩えた歌は見出せない。八九四年、大江千里の『句題和歌』に「よるべなく空にうかべる心こそ夢みるよりもはかなかりけれ」と「まぼろしの世とし知りぬる心にははかなき夢と思ふ成けり」の2首が見え、九〇五年の『古今集』では、「ぬるがうちにみるをのみやは夢といはんはかなきよをもうつゝとはみず」(835)の他3首ほどあるが、「この世ははかない夢」と詠んだ歌はまだ少ない。その観念が定着をみるのは、源信が「この世界はきたなく苦しく無常の

世界<sup>④</sup>として、厭離穢土、欣求浄土を説く浄土教的思想が人々の間に広まってからであろう。この時代、世は末法さながら、地獄は実在感をもって人々を圧していた。現世の地獄の中、救済を願って、西方浄土を念じ観想する。ここにおいて人々は、極楽往生、阿弥陀浄土を希求し、そのみが確かな存在となった。そこでは、この世は仮の、はかない夢でしかない。「この世ははかない夢」という観念は、ここに定立し、一般化していく。

『源氏物語』では、「夢」は136例、その内、「夢のやう」26例、「夢の心地」が20例で、これに、「夢語り」「夢路」「御夢」等を加えると、更にその例は増える。この夢は、夢そのものを示すと共に、驚き、喜び、悲しみ、煩惱等を表現している。特に、恋の場面で多く用いられているのは、『源氏物語』が『万葉集』、『古今集』から引き継いだ夢とも合致している。更に注目すべきは、夢の語が死の場面にも使われ、はかなさの比喩となって無常を表現していることにある。無常観を表わす「常なし」が38例、「定めなし」が36例『源氏物語』にはあるが、これと同じく無常を表わす「この世の夢」「ありし世は、みな夢に見なして」といった言葉は随所に見られる。「夢のよ」は1例しかないが、『源氏物語』においては、まさに「この世ははかない夢」でしかなかったのである。『往生要集』に書かれた地獄の様相と、現実の地獄が重なって描かれた『源氏物語』

の地獄。その中で人間達は救いを求めて苦悩のうちに彷徨する。「夢」Ⅱ「はかない」は、ここで無常観の表現方法として定着をみる。

### 三

夢という語に潜りこんだ仏教の無常相として把えられる夢以外のものは夢告として物語に描かれる。『古事記』以来、夢告は神自身が夢に現われたり、シンボライズされた夢として人間に与えられたが、そこでの夢は全くのうつつであり、その夢によってうつつの世界はつき動かされ、物語は新しく展開していく。『源氏物語』におけるこのような夢告は15例あり、5例がシンボライズされた夢である。明石入道を見た、例の「須弥の山」の夢は、夢合せさせるまでもないほど鮮やかで確かなものだった。この夢は入道だけでなく、明石上、明石女御の運命までも予言している。入道は、ただこの夢だけを信じて生きてきた。つまり、夢によって入道の生き方は決定されたと言える。その他、藤壺が懐妊した後の源氏の夢と夢合せは、大きく源氏の運命を予言するものであったし、「螢」巻の内大臣の夢合せは玉鬘と内大臣を結ぶ素地となっている。もっとも、物語内部において夢は、「古代にあつては解かれたとおり実現された。」<sup>⑩</sup>よるだけ、夢合せは重要な占いであった。「夢あわせは、

神の啓示、他界からの信号としての夢を解説し、未来を先取りしようとする神的なわざ」(同212頁)であり、合わせるのは普通、陰陽師である。陰陽道は、その密教との類似性により仏教と深く結合し、又、密教の呪的祭儀的要素が媒介となり、神祇信仰とも接近して、この時代を大きく覆っていた。予言的夢と運命を導く夢。柏木が女三宮との密会の間に見た夢は、柏木の苦悩を深めさせ、死への道を辿らせることになり、「手習」巻の浮舟は妹尼の初瀬での夢が、その運命を導く。

同じ様に物語の人間の運命を導き、物語を動かしていく夢告のうち、姿を現わし明確にその意志を伝えたり、指示を与えて見守る存在を知らしめる夢は10例ある。それは殆どが父である。「須弥」「明石」巻での桐壺院の出現と、源氏と明石入道との二人同夢による出会い、朱雀帝の夢見と眼病、大政大臣の死、弘徽殿大后の病。遂に源氏召還の宣旨が下る。夢は強烈なうつつとなって運命の急転回を迫るのである。「桐壺院の霊は仏教的な面とともに祖霊としての一面が認められる」と、玉上琢弥氏、柳井滋氏は指摘している。古代摂関政治下の天皇として聖別された桐壺帝は、「共同体を祭祀的に体现するシンボル」<sup>⑪</sup>としての祖霊であり、それだからこそ吉神と同じく宮廷守護神の性格を有している。須磨流謫は、「祖霊との合一」(同、西郷氏)を前提とした成年式、通過儀礼なのである。又、

三谷栄一氏は、「冥府で出会う死者」祖霊は他の文学では母性的なものが多い。」と、ここでの父の出現の特異性を指摘している。これはおそらく、三谷氏が岡一男氏を引いて説くように紫式部のエディプスコンプレックスや自己体験等の外的要因で説明すべきものではないだろう。それは、「事が皇統に拘わるから」であり、物語内の必然の中にその要因は求められる。源氏と母更衣の關係は藤壺によってのみ具象化され、母更衣と源氏は直接にはつながり得ない。全ては、愛情と權威の体現者として「生き方の系図」を父から受け継いだのである。

「蓬生」巻の末摘花の夢に現われた故父宮、夕霧の夢に現われる柏木、玉鬘の乳母の夕顔の夢、「総角」巻、八宮の中君と阿闍梨の夢への出現。どれも己の子孫の守護と繁栄に寄与し、見守る存在として祖霊的である。これら、「祖霊的なものが飛来してこの世と連絡をとりつづけている状態」<sup>④</sup>「この世にきがかりやうらみがあつて、天空に立ちやすらっている状態」(同、藤井氏)は、「あまかけり」という語で表現される。『源氏物語』では、「あまかける」が4例、「翔る」が1例あり、亡き父か母があまがけつて夢に現われている。死んだ人間の魂が肉体から遊離して飛翔するということは、日本古来の呪的靈魂観に陰陽五行系の遊離魂信仰、中国の神仙思想、道教が影響している。それが、仏教の色濃い場面でも使われている。夢

を用いた歌と同じ構造が物語の基層にも見えるのである。

#### 四

このように、『源氏物語』の基層には、古代的な呪的祭儀性によって把えられる夢が存在する。その夢を見ることにより、人間は自らの運命を左右されるといふ人間を超えた存在の力を実感し、認識したのだった。更に『源氏物語』を見てみると、このように外在して大きく働きかける夢だけでなく、人間の内面に深く関わりながら、その内面の精神の表われとして外界に実在し、夢となるものがある。いわゆる物の怪である。

魂の遊離は死んだ人間だけのことではない。「個人の健康と精神の安定ということがタマの観念と関係づけて願ひ求められたために、病氣や精神の異常(烈しい怒り、悲しみ)は、タマの活動」遊離による」と古代では信じられていた。『源氏物語』にも「物思ふ人のたましひは、あくがるものなれば」(五引)とある。この魂が、恋情や苦悩、嫉妬等の個人の感情の昂揚のあまり、身体から「あくがる」ようになったのは、『万葉集』の頃からである。それが頻出するようになったのは平安時代になってかららしい。こうした遊離魂は、人間の生霊も死霊も、非人格的靈魂も、物の怪として認識され、異常な精神状態や行動、病氣、死の原因とされた。そして、『古今

集』に「夢の通ひ路」が登場したのと時を同じくして、物の怪は万葉時代の単なる魂の浮遊として現われるのではなく、確かな根拠と相手を得て、その夢に出現するようになる。

『源氏物語』には多くの物の怪が登場する。しかも、それらの物の怪は何かしら怨みを抱いている。「夕顔」巻の怪異、葵上と六条御息所の車争いに端を発した物の怪の登場。ここでは夢が夢の域を出て、うつつの世界に踏みこんでくる。二つの隔った空間が、同時に有する一つの空間として確実に存在する。人の意識の及ばない夢の世界が、かえってその事の故に意識の実相に迫る。うつつの深層、死の影を揺曳しつつ、その暗黒部をあばき、うつつの世界をつぎ動かす。そして、夕顔と葵上の死。夢がうつつを凌駕しているのである。源氏の夢に現われて恨みを述べる死後の藤壺、女三宮降嫁後の紫上の苦悩と源氏の夢への出現、そして、六条御息所の物の怪の再登場。藤井貞和氏は、「若菜下」巻の紫上に憑いた物の怪の訴えた言葉の中で「天翔りて」と「わびしき焰」を引いて、「思想的にべつべつであるが、ひとつの物怪の語りのなかに共在している。(中略) こうした思想の混在は物怪なるものをささえる世界のふくざつさをそのままあらわしている。」と述べられた。

かくて、『源氏物語』においては、夢は物の怪の通いとしてもあつた。物の怪は夢の通ひ路を通して夢に現われるのである。ここに、

#### 『源氏物語』の夢と方法

「一夫多妻制がもたらした女の悲劇」を見ることもできる。この怨念、嫉妬は、男と女の愛情の摩擦によって生じ、女は一人孤独の中で煩悶する。それは正しく人間の苦悩である。直接男に訴えられない心の内の苦しさは、深く沈潜し、物の怪となって男の夢の中に現われるしかなかった。男女の相剋葛藤というまさに人間的な精神の苦闘が、それを負う内面の心理の問題として表出されるのではなく、他ならぬ物の怪という形をもって立ち現われてくる。そこに、『源氏物語』の古代物語性を読み取りうるのである。

### 五 結び

『源氏物語』は、以上のようにその古代物語としてのありようを夢においても荷っていた。それは、他界と現実、人間と人間とを、明暗・善悪・禍福・結合分離等の様々な様相において結ぶ回路であった。それらは、『源氏物語』が引き継ぎつつ、より豊かな表象として再創造したものである。

『源氏物語』には、他の古代文学では、『宇津保物語』に1例しか見当たらない夢が2例ある。それは、口実・方便として使われている夢である。「浮舟」巻の右近の言葉に、「夢見、さわがしかりつ」と言いなすなりけり。」(五二)とあり、地の文にも明らかのように、これは口実である。もう1例は、「若紫」巻の源氏の言葉に見える。

夢が、口実として通用するのは、それが人間と他界を結ぶ犯してはならない聖なるものとして、その予言性、啓示性が信じられていたからであり、そのような社会でのみ手段としての意味を持ち得るのである。『源氏物語』が、とりわけ独自の方法として夢を表現し得たものが口実的な夢だったのである。

このように、『源氏物語』が引き継ぐ夢は、古代的呪的祭儀性と共に、仏教をも複合した構造を示している。物語世界においては、人間と他界、人間と人間を結ぶものとしての機能を有していたと言える。しかも、その中に『源氏物語』が古代物語である故に負っている聖なるカタリとしての方法が、更に進んで人間のモノガタリとしての方法へと発展していく道筋が見てとれると言っても良いとさえ思われる。『源氏物語』における継承と創造の問題の一端を見ることになるのである。

△了▽

- ① 卷二〇三首、卷三〇一首(夢乃和太)、卷四〇二一首、卷五〇三首、卷七〇四首、卷八〇一首、卷九〇二首、卷十〇二首、卷十一〇一九首、卷十二〇二五首、卷十三〇五首、卷十四〇一首、卷十五〇六首、卷十七〇八首、卷十九〇一首。
- ② 土橋寛教授『古代歌謡と儀礼の研究』496頁。
- ③ ありそゆもましてや思へやたまのうら離れ小島の夢にし見ゆる(一二〇二)他一二三六、一三四五、一七二九等。
- ④ 岩波日本古典文学大系『万葉集』漢数字は歌の番号を示す。以下、古

典の引用は大系本による。

- ⑤ 春歌下〇一首、物語〇一首、恋歌一、二、三、四、五〇二六首、哀傷歌〇三首、雑歌下〇三首(内、942番は2語)この中に『万葉集』にはない「夢路」が5例、「夢の通心路」が2例、「夢のたゞ路」が1例含まれている。
- ⑥ 『源氏物語』本文引用の漢数字は巻、算用数字は頁を示す。
- ⑦ 見てもまた逢ふ夜生まれなる夢のうちにやがてまざるゝわが身ともがな(一、206)
- ⑧ 世の中は空しきものと知る時しいよゝますます悲しかりけり(巻五、七九三)世間を常無きものと今ぞ知る平城の京府の移るふ見れば(巻六、一〇四五)
- ⑨ 梅原猛氏『地獄の思想』中公新書66頁。
- ⑩ 一条御息所急逝後、落葉宮の夕霧への返事の中に「いまは、かくあさましき夢のよを」(四、139)とある。
- ⑪ 西郷信綱氏『古代人と夢』平凡社236頁。
- ⑫ 玉上琢弥氏『源氏物語評釈三』162頁。
- ⑬ 柳井滋氏『源氏物語と靈験譚の交渉』(『源氏物語研究と資料』所収188頁)
- ⑭ 西郷信綱氏前掲書58頁。
- ⑮ 三谷栄一氏『源氏物語における物語の型』(『源氏物語講座巻一』所収)
- ⑯ 深沢三千男氏『源氏物語の形成』68頁。
- ⑰ 益田勝実氏「日知りの裔の物語」(『火山列島の思想』所収)
- ⑱ 藤井貞和氏『源氏物語の研究』(『日本文学』一九七六年11月)
- ⑲ 「我が、かく悲しびを極め、命尽きなむとしつるを、〔故院が〕助けに、〔空を〕翔り給へる」(二、63)「」は傍注。

- ⑲ 「あまがけりても、〔大君の霊は〕かやうなるにつけては『いとど、つらし』とや、見給ふらむ」(五、45)  
他に宇治十帖に1例見える。
- ⑳ 土橋寛教授前掲書188頁。
- ㉑ 藤井貞和氏前掲論文。
- ㉒ 野村精一氏「源氏物語の人間像―六条御息所」(『源氏物語の創造』所収、95頁)